

次の句の「不堪折」の始末に困るだろう。それに「露喰」を女士は「霜臉」とするが、管見では霧を霜とする本を知らぬ。

中國の詩を、中國の詩としてしか見方い立場から解放するために、他の視点、たとえば西洋の詩という観点から、ながめてみることは、よいことだ。ただ、そのような視点に立つ者が、西洋に典型を求めて、それに合うからこの中國の詩はよい、といった方向に論調の傾くことがある。二十世紀前半の日本と中國の文学研究には、その傾向がかなり濃厚だった感じがする。特にその傾向の濃厚な日本にいるので中國のものを読んでもそう感じるかもしない。

李賀が病身だったからその詩が病的だ、といつような見方も、もともうらしいが、そのことによつて何一つ問題は解決すまい。

『文哲季刊』の同じ号の四六一五〇ページに、謝佐禹の「中唐詩人派別」を載せる。

はじめに、伏見の時代区分は不正確だ、といい、李白・杜甫が盛唐の代表とし、これを過ぎれば中唐に入れるという。しかも王維・孟浩然を中唐に入る。その上で三大別し、その各おのをさうに細分する。

- 一、写景派 (甲) 清遠派 王維・孟浩然 (乙) 古樸派 柳宗元・韞穴物
- 二、写意派 (甲) 博大派 韞愈 (乙) 奇奇派 孟郊・賈島 (丙) 幽冷派 李賀 (丁)
- 鬼怪派 薦全・劉叉

三、写實派 (甲) 問題派

白居易・元稹

(乙) 平麗派 張籍・王建

幽麗派についての記事を以下にうつすつもりだが、あほらしくなってきたのでやめる。謝は同じ雑誌に「論王孟詩之異同」をページにわたって書いているが、これまた受験参考書によくあるよくな平板な分類に例句をそえた程度のものだ。こんなものをなぜ学術雑誌にのせるのかといった感想も浮かびかけたが、わたしの書くものも似たようなものだろうから、感想の方も押しこめることにする。とにかく、今類の大いに流行したのも、この二つの特色としらるかもしれない。

△卷之十

唐韓愈 謂辯

清同治己巳年江蘇書局重刻東雅堂本(洪浩培影印)

愈與李賀書勸第舉進士第舉進士有名與賀爭名者毀之曰第父名晉肅第不舉進士爲是勸之舉者爲非聽者不察也和而唱之固然一辭皇甫湜曰若不明白子與賀且得罪愈曰然律曰二名不偏諱之者曰謂若言徵不稱在言在不稱徵是也律曰不諱嫌名釋之者曰謂若禹與兩丘與蕪之類是也今第父名晉肅第舉進士爲犯二名律乎爲犯嫌名律乎父名晉肅子不得舉進士若父名仁子不得爲人乎夫諱始於何時作法制以教天下者非周公孔子歟周公作詩不諱孔子不偏諱二名春秋不諱不諱嫌名康王劍之孫寶爲昭王曾參之父名荀曾子不諱荀周之時有駢期漢之時有杜度此其子宜如何諱將諱其嫌遂諱其姓乎將不諱其嫌者乎漢諱武帝名徹爲通不聞又諱車之轍爲某字也諱昌后名雉爲野雞不聞又諱治天下之治爲某字也今上章及詔不聞諱渙勢乘餚也惟宦官宮妾乃不敢言諱及榜以爲篇犯士君子言語行事宜何所法守也今考之於經

賢之於律舊之以國家之典賀舉進士爲可邪爲不可邪凡事父母得如曾參可以無譏矣作人得如周公孔子亦可以止矣今世之士不務行曾參周公孔子之行而譖親之名則易勝於曾參周公孔子亦見其惑也夫周公孔子曾參卒不可勝勝周公孔子曾參乃比於宦者宦妾則是宦者宦妾之孝於其親賢於周公孔子曾參者耶

▲ 从 11 V

唐沈亞之

序詩送李膠秀才

沈下賢文集

影明本

(四部丛刊) 卷九

歌詩之所以爲發寤其旨甚遠夫物情暢樂怨抑之感呼而散之大空還會於風雲降于水土包聲于陶埴之器
髮鬢之變盡搖于樂樂之所感微則古於音韻則圓於詞微於音者聖人察之章於詞者賢人畏之故動人之君
欲以聞其下忠主之佐使以達其上夫往代之詩樂皆能沿聲諧韻今敵其文以觀之而其代興衰可見也寧近
世學者固不變風從律耶何爲其詞不聞充陳於管絃乎今樂府既闕所奏如有忠言之意衆所仰哉余故友李
賀善擅南北朝樂府故詞其所賦不多怨鬱悽之功誠以蓋古排今使爲詞者莫得偶矣惜乎其終亦不備聲
絃唱賀名溢天下年二十七官卒奉常由是後學爭踵賀相與繼裁其字句以媒取價嗚呼貢詠合韻之勤益遠
矣膠亦諸王孫頗專七言詞始來長安人以爲思轍賀今一不中第言歸故楚江陵下豈欲以寄其情於煙波顧
有誤余乃敢悉叙詩歌之大端以爲別贊

*『全唐文』卷七百三十五 で題を「送李膠秀才詩序」とし、「降于」「摶于」「搖于」の子と於とし、「不多」と「亦多」とし、「爭踵」と「爭躍」とし「煙波」と「烟波」とする。

▲ 从 12 V 唐李肇 唐國史補 中國文學參考資料小叢書第一輯3 古典文学出版社
元和已後，爲文章，則學奇詭于韓愈，學苦澀于樊宗師。歌行則學流蕩于張籍，詩童則學雄激于孟郊。學淺切于白居易，學淫靡于元稹。俱名爲元和體。大抵天寶之風尚黨，大歷之風尚浮，貞元之

風尚湯、元和之風尚怪也。卷下

韓愈引致後進，爲求科第，多有投書請益者，時人謂之韓門弟子。愈後官高，不復爲也。

「出版說明」にへ唐國史補三卷，李肇撰。新唐書藝文志說李肇做過翰林學士，著有翰林志一卷，王定保撫言說他元和中做過中書舍人。唐國史補是化做尚書左司郎中時寫成的。／と記す。「新唐書」藝文志にはへ李肇國史補三卷 翰林學士坐薦極書自中書舍人左遷將作少監／またへ李肇翰林志一卷／とある。「唐摭言」卷三「散序」にへ案李肇舍人國史補云／とみえる。元和中に中書舍人になつた、という記事はまだがし出せない。みつけたとき補いたい。『宋史』藝文志の二にへ翰林內誌一卷又翰林志一卷／へ國史補三卷／。三にへ經史釋文類三卷／がみえる。翰林內誌は「新唐書」には見えないようだがへ經史釋文類二卷／が李肇のものとして出ている。『宋史』にのせるものとは題と巻数とが少しきいちがうが、同じ書なのだろうか。

△雜記・39△ 李 肇 遺 句

1972.6.25

『全唐詩』李肇の最後に「句」として「不見山巔樹 檜杌下爲薪 日暗井中泥 上出作埃塵筆
稿一作宣甘井中泥時至出作塵」「情知一丘處 不謝千里印」「倚劍登高臺 悠悠送春目」の三
つをあげ「以上四並びに海錄碎事に見ゆ」という。『海錄碎事』（明萬曆戊午年刻本、民國五
八年新華書局影印）には他にも李肇の作とする句をのせる。「爲君持此凌蒼蒼上朝三十六玉皇
卷一「鳴琴半瑟會軒朱桂映朱軒也」卷二「從若翠葉蓋花色 獨共西山守中國」「きりである、王琦

は「錦綉萬花谷、海錄碎事に引くところの断句教則に至っては尙も類せず、故に棄てて錄せず」という。だしかし李賀の句としてけ綴わしい。しかし句は他の句と結んで思いがけない局面を開する。それが詩だ。いまの賀の集にも切りはなせば賀のものとは思ひにくい句もあるのである。賀の名のつくものは、綴わしくとも、見棄てるよりは、保存しておくほうがよい。

△雅記・40▽人情

1972.6.26

広瀬旭荘の『九桂草堂隨筆』巻五から次のような記事を、昨年十二月一日の日記に書きぬいている。一、荊州の人葛清、遍體樂天、詩ヲ刺ス。三十餘首、人呼テ白金人行詩圖トナスト。思フニ樂天ノ詩、人情ニ近キ故ナリ。若長吉ノ詩ナラハ。豈刺ス者アランヤ▽ つまいことをいつもんだと感心した。書きぬいた時にこそう思フたかどうかは、おぼえていない。

わたしはまえから、白居易はジャーナリストだとおもつている。「んにちの新聞を千年前に先取りしたのが、かれの詩文だ。その点でかれは偉大なジャーナリストだといってよい。かれはちょっと進歩的で、しかし本質的には保守的な人間だ。だから諷刺のためになる。前衛詩人を槍玉にあげても、世間はその名さえ知らぬ變な人間を笑ってよいのかあわれんでよいのか判断に苦しむだけだろう。旭荘は少年時代に李賀を愛読したらしいが、あるいは中島子玉にそのかざれてのことだったのだろう。やがて李賀から遠ざかり、大詩人になつた。一流の好きな人が白居易を愛するのは当然だ。不易流行。すなわち人情である。余談ながら、ことばはどんどん変化する。旭荘の「ことばもいまの国語專攻の大学院学生の人にんが説解するだろうか。

△絵記・41▽

廻風類

続

1972.6.27

宋の劉克莊の『後村詩話』巻二に、「將に飛ばんとして更に乍す回頭舞。口に落りて猶お成す半面の妝」宋景文の落花の詩なり。世に称する所たり。然れども李賀には「落つる時も猶お自ら舞い、墜いし後も更に香を匂ふ」。李の下句、尤も妙。上手下手は口にかくとして、景文の落花の詩の先跋を求めるなら、李賀の「殘絲曲」1002(20646)の「落花起作廻風舞」をあげるべきではないか。もともと、いま手許に宋祐の『賦文集』がなので落花の詩の余体を覗むことができないから、確かなことはいえぬが。『海錄叢書』巻二、國舞之情の条に「廻舞が情威蕩襟飲之日在茲々選」とあり、落花つかぬ句に「廻舞」と題して『文選』みると、卷四十六、王元長「三月三日曲水詩序」で「禊飲之日在茲風舞之煙威蕩」とあつた。王元長が、ノルマニアムアラベラと説明した風舞の情を李賀が目に見るよりに描いてみせたのだろうか。

△絵記・42▽

小

王

王維の「奉和楊駱馬六郎秋夜即事」の「小玉便に香を落べ」句の小玉について、清の趙殿成は注するへ鮑令暉に「舊沙門の妻郭小玉の爲に作る一首」あり。また丘園賜詩に「母娘小玉飛んで烟と作る」自註に云う「夫差の女小玉、死後、形、玉に見られる。その母ノ娘を抱き、嚴徽として烟霧の空に散するが如く然リ」しかれども元微之の詩「小玉に林に上りて衣衾を鋪く」李長の詩「小玉の母を題にば山色を見る」を観れば右ふと図じ意。僕に侍兒となして解するも未だ詳ならず」と云ふ。11111111李賀の詩は「江樓曲」4200(20844) 王琦は趙氏の引いた元微之の句を引く。

さらに路德延の詩句「酒帰　丹砂　暁く、茶は小玉を信して煎しむ」を引きへ疑うらくは唐時多く小玉を以て侍女の別称となすか」という。

王琦、字は琢崖、浙江錢塘の人。生卒年不詳。清の世家の雍正のはじめに在世。商召南・杭世駿と親友だった。はやく妻を失い、門を開いて著述に専念した。伝典に精熟し、かつて顧殿成が王右丞集の注をつくったとき、これを助けたという。それなら、さきの趙注は王氏が助けた部分であるかもしれない。

王琦（乾隆二十三年（一七五八）正月その著『李太白文集輯注』の自序をかき、同二十五年冬、『李長吉歌詩掌解』の自序を書いている。かえりみて想起たうやるを得ぬ。

▲雜記・43▼ 晓 蒼 蒼

仁科礼宗（一七九一一八四五）の『山谷詩文抄』（天保乙未（一八三三）醉古堂藏板）を読んでいたら、卷三に「春曉」と題する作を見出した。「春樹　曉蒼蒼　春雲　草堂を繞れり　山人　夢初めて覚む　月落ちて　潤花　晝ばし」　ひたしけ反射的に李賀の「追風畫江潭苑図」の第一首3129（20773）「吳苑曉蒼蒼　官衣水漸黃　小鬟紅粉薄　騎馬珮珠長　路指臺城過　羅薰袴褶香　行腳通聲響　今日似襄王」　「曉蒼蒼」という字面は『文選』になく、李白にも杜甫にもない。では李賀の発明かといふと、そうではなく、賈至の「早朝大明宮呈兩省僚友」に「銀燈朝熏紫陌長　禁城春色曉蒼蒼」の句がみえる。王維・岑參・杜甫がこれに唱和し、「唐詩選」にも收め、はなはだ名高い作である。賀の口かれの作としてけみすみずしいものだが賈至の作のお

「とりしたのにくらべると小股のきれあがつた感じがする。白谷はどちらに学んだのだろう。たぶん賀の作である。山人は恐らく、草堂の夢に呉死に遊んだのであろう。そう思わせるなまめかしさがある。白谷は李賀をそれほど重んじた人ではない。しかし集は読んでいることは確かである。白谷については、わたしの弟藤田尚雄が「虫明散歩道」と題して連載した文章に、二回（雑誌『楓』）（昭久光明園慰安会発行、昭和四十一年十月・十二月）にわたって、書いていている。近く発行を予定している雑誌「方向」に転載する。

△ 雜記 44 ▽ 袁枚

1921.7.2

深川星巒の編集した『清六大家絶句鈔』（京都東塘亭・大阪蒿山堂合併、発行は明治だが年月不明）の第五十九冊の五冊目、隨園・袁枚の作を收める。その第五冊のはじめに、「李昌谷有馬詩二十二首余倣之作劍詩」がある。

不試千秋寶	高懸萬物驚	羞臘健兒去	斬刺立功名
太乙下龍堂	閻門匹練光	六州爭聚鐵	嘉錦雪肝腸
斷柄蝕胡沙	長梢鎌鐵叉	陰晴頭欲現	新薔血交花
白走一條烟	三更風滿天	生王頭不壽	何必煉神仙
爾欲吳王我	魚盤殺氣多	誰知剝節變	飛電練身過
棄擲莓苔裏	光能射斗牛	當作犁耙用	神鋒讓曲鉤
徒報嚴仲仇	不濟荆卿事	笑指雷公爐	純鉤識羞赤

似雪清塵念
耳熱悲歌處
永斷不平事
小隊逐黃塵
瓜鬚愁淋漓
玉勒騎飛馬
海角飛殘月
事急方求子
半夜孤燈坐
聖鐵含灰古
氣走蛟龍宮
神大難爲售
傾城求一見
驛平歸塞早
關匣秋風起
藏身片語無
賈的詩を模倣するだけでなく、賀の詩に対する批評をも含むとみてよいだろう。
袁枚（一七一六—一七九七）字は子才、簡齋と号し、また隨園老人と号した。浙江に初の人。

如松臘城寒
平生最境君
甘バ死匣中
琅琊鐵補禱
猿公雜嘯啼
金刀挂在身
空堂作亂波
洪爐不煉銅
空梁一頭墜
焦銅帶血新
心爭日月光
丈人小七首
笑問妻伯約
被髮有人言
誤認作青鳴
騰可如升大
切莫鴟忠臣
錫時頤禱祝
文章奇絕处
中原千万户
縱使無情鉄
能教不報恩
方知至神物
棄擲風塵裏
猶能斬亂絲

寧學日三五

當作美人香

樽窖十萬口

交付與朱雲

世間話將老

若箇識雌雄

君王懷老物

臣是旣干將

但求名器就

誰解惜夫妻

坐來無一語

知是報仇人

南山北山處

被髮有人言

夫人小七首

誤認作青鳴

空梁一頭墜

騰可如升大

切莫鴟忠臣

錫時頤禱祝

文章奇絕处

中原千万户

縱使無情鉄

能教不報恩

方知至神物

棄擲風塵裏

猶能斬亂絲

舒卷任風胡

雪大上天還

關匣秋風起

藏身片語無

如松臘城寒

平生最境君

甘巴死匣中

琅琊鐵補禱

猿公雜嘯啼

金刀挂在身

空堂作亂波

洪爐不煉銅

空梁一頭墜

焦銅帶血新

心爭日月光

丈人小七首

笑問妻伯約

一七三九年進士、翰林院庶吉士となり、溧水、江浦、沐陽、江寧などの知縣をつとめ、四十歳、官界を去り、江寧の小倉山に隨園を築き、文壇の大御所として知られた。八十二歳の辰暮をたもち、弟子は天下に満ち、毀譽相半ばしたこの人は、手宏眼高、夭折した唐の鬼才をよく味識していたようである。李賀にかわりはないが、目にふれた二首をついでに錄してあく、「蠅」・山頂蚊蟲尽 蕭然絶魚鹽 苍蠅偏不斷 高处有詩人 「水」 一片輕冰剎 蕭蠅尽転身 許儂登席上能救熱中人

△雜記・45▼

『范愛農』

1972.7.2.

雜誌『鷗風』創刊号（『鷗風の会』一九七二年三月三十一日発行）を荒井健氏から贈られた。中島長文「范愛農」を読んで感動した。知識として教えられることも多かった。

「范愛農」はへ魯迅の伝記を書くばあいのほかは、あまりとりあげられることもない文章▽だそうである。わたしは魯迅の文が好きで折にふれて読む。しかし研究しようとは思わず、また魯迅研究といわれるものあまり読んでもいいない。だから左の文を読んでふしぎな気がした。思いヶえせば、ふしぎでもない。いま中島氏がとりあげたことを奇とすればよい。

魯迅の「范愛農」のなかでは徐錫麟追悼の同窓会での范と魯迅との言い争いが前半での山と立っている。周作人はこれを虚構だとするが、氏は、これが虚構ではないことを「の一編で考証し、魯迅の「范愛農」がへ単なる回想でなく、へ眞実がそのまま詩であることもあくそくその詩としてとらえるようである。

わたしは▲雜記、38▼二〇世紀の李賀（二）鲁迅・付記で、周作人のいうようにそれがフイクションならば、という前提で、小文をかいだ。あの文章の中ではわたしが最もべたかったことは、小たりの口論が事実か虚構かという問題どうが、たとこにあり、また、わたし自身、中島氏の考証を追試するいとまがないので、小文はそのままおいておく。魯迅の読者の一人としての希望をのべるならば、中島氏の提起した興味ふかい問題を、魯迅研究家が放置せず、徹底的に追試してほしい。わたしが感動したのは次のようないことである。

魯迅の文章はトゲだ。トゲが刺さると鋭く痛む。急いでトゲ抜きでぬいて捨てる。それでも痛みはのこる。しかしやがて痛みは消え、トゲのこと忘れ。それも一法である。

抜こうと思つてもぬけず、折れ曲ったトゲは、その周囲の皮膚や筋骨を齧蝕はじめる。それでもメスでこじあけ、齧蝕した部分と共にトゲを捨てなしができる。それも一法である。

齧蝕はトゲに毒があるためか、あるいはトゲの刺戟によつて直ちに齧敗してゆくものがおのれの側にあるためか、そのような思いのなかでトゲを抜くこともできず疼きに耐える。これも一法である。中島氏の文章には、この疼きに耐える人の愚画と痛みに似たものがひびくように、わたしには感ぜられる。たとえば新聞「越鐸」についての魯迅と青年たちとの応酬に關して氏が次のように書くところに、わたしはそれを感じるのである。

卑俗な正義、あるいは正義の俗的側面とでもいべき傲慢な論理で人を理解するといふ点ではかわりはない。あのとき魯迅は愛農を卑怯未練とみたのだが、その自分をいまは「越

「解」報の青年たちにみたのである。青年たちはかれがかつて愛農をみた論理をすゝと露骨に出してかれをみているにすぎない。そしてそういう正義の論理の教懲さが現実に翻弄されるとき、いかに人を裏切るかを、かれは范愛農との邂逅などを経て感じはじめていたにちがいない。しかし、それは見る側のことであって、見られて方はちがっていた。魯迅は世故を知った故に沈黙したが、愛農は吐きだすように言った。そのことばを核に「范愛農」は展開する。

ひとたび慟哭してのち死ぬまで言つに堪へない体験がある。范愛農が同鄉会で発したのはその慟哭だったのだろう。死んだ子の年をかぞえるように死ぬまでかきくどけねばならぬ体験がある。魯迅のような作家に青年時代にぶつかってその人について物をかきはじめるということは、たぶんそれであろう。中島氏が同じ雑誌で「魯迅の手紙」を書いているのは、あるいはそのようなくりごとのひとつであろうか。

▲ 雜記・46 ▼ 己生須己養

1972.7.3.

へ今日の世の中に、子供の多いことだけ、全く厄介な事です。しかし出産の費用の問題はまだ軽い方で、大問題は将来の教育です。國家が基本方針を欠いているのだから、個人には尚さら手の下しょがないません。私は大体後醍醐の憂いを絶つことを目的としていたのですが、一寸した不注意のため、子供が出来てしまつた。その将来を思うと、いつも暗然たるものがあります。しかし「うなつた以上は仕方がありません」、長吉「唐の詩人李賀」の詩に、「己レガ生ミシハ禰ク己

し養ウベシ、担ラ荷イテ門ヲ出テ去ル」とあります。一晉勞に報じて、孺子の牛となる外なく、
今さら文句はいえません。(「松枝氏誤文」) 魯迅が一九三一年四月十五日、李秉中にて手
紙の一節である。「この年魯迅は五十一歳だった。この手紙や「自嘲」と題する詩を読むと、思う
ことが多い。だがわたしの思いを語つても仕方がない。かれが手紙に引いたのは、李賀の「感諷
五首」の第四首(二〇七五)へ星盡四方高天 編物知曙 已生須己養 荷擔出門去 君平久不反 廉
伯篤國路 晓恩何譏諭 關闈千人語の句である。松枝氏誤文が、己レガ生ミシハ須ク己レ養ウ
ベシ、といふ部分は、わたしの扱る臺北宋本の文字に従えば、己に生みたるは須く己れ養うべし、
とても訓まねばならぬことになる。ところがその句を、宋蜀本は、已生須己養、とし、金刊本は
北宋と同様、元刊本は宋蜀本と同じ、王注本は、己生須己養とする。そもそも木版本では、己・
己・己の区別があいまいであるのが普通で、北宋にしてしも他のすでにの意味で用いられる己
は己とすることが多い。だから「こし己生須己養ではなく己生須己養なのかもしれない。これらの
本のうち王注本がもつとも流布したようだから、魯迅が王注本を見たとすれば、ごたごたいう必
要はなさそうだ。けれども魯迅が王注本しか見なかつたかどうか疑問である。人民文学出版社
本『魯迅全集』け、己生須己養とするが、これは編纂者がそこまで厳密に注意したかどうか。
魯迅の手紙が残つてゐるなら、もう一度てりあわせる必要があろう。

己生須己養なら、生れてしまつたものなら自分で養わねばならぬ、だろうし、己生須己養なら
生れたら養わねばならぬであつて、己生須己養し自分の命は自分が養わねばならぬ、と読めて